

## ●2012 年度 研究開発戦略説明会 質疑応答議事録

日 時 : 2012 年 4 月 5 日 (木) 15 : 00~16 : 10  
場 所 : 株式会社富士通研究所 岡田記念ホール  
説明者 : 株式会社富士通研究所 富田社長

---

### 質問者 A

- Q. 研究開発費についてご説明がありましたが、今後の研究開発費の見通し、人的リソースの比重のかけ方について教えてください。
- A. 景気などにより状況は異なりますが、富士通全体の研究開発費は総売上の 5.2% (2010 年度実績) となっており、富士通のビジネスモデルを考えると、この程度の規模は必要だと考えています。今後もこの水準を維持していきたいというのが、全体の大きな考え方です。その中で、何に力を入れていくか、何にリソースを集中していくか、というのは選択と集中の中で、コーポレート全体で考え、リソースを配分していきます。研究所は、長期的なレンジでの研究を進めているので、短期的なビジネスに大きく影響されないということが重要です。今の開発費の水準を維持しながら、短期のビジネスが厳しいのであれば、一時的にそれを支えるようにリソースを配分する、一方富士通の今後を支えるために、中長期についてもきちんと維持していく。そういった短期、中長期でのバランスを維持しながら進めていきたいと考えています。

### 質問者 B

- Q. 日本の知識集約型産業がアジア諸国に追い上げられています。富士通研究所として、世界の競争相手と戦うために、研究員をどのようにしていくのか、考え方を教えてください。
- A. 富士通研究所の人員 1500 名のうち、1300 名が日本で 200 名が海外におります。今後は富士通が中長期的に成長するため、日本にいる人材のスキルを強化するとともに、世界の著名な研究機関との連携を深め、その中でグローバルに戦える人材を強化します。昨今の円高で製造業にとって非常に厳しい状況にあります。しかし日本の製造業は今まで危機が起こるたびにそれを乗り越え、「雑巾を絞ってもでない」程のコスト削減を徹底して行ってきました。確かにコスト削減には限界があり、中国や韓国や台湾の企業が台頭してきた点については、我々日本企業に反省点もあります。日本の製造業は、より知識集約型に変革していかなくてならないと考えますが、一方で製造現場を大切にしています。私はこのギャップが 100%悪いことだとは思っていません。日本は中国・韓国・台湾を超えた、ものづくりを大切にした上で知識集約型を志向していく、新しい枠組みの製造業を目指していくべきだと考えます。

### 質問者 C

- Q. せっかく様々な研究をされているのに、研究者の顔が見えないと感じています。研究は人が行っているのですが、もっとメディア等を通じた露出が多い方が、良い人材が集まってくるのではないのでしょうか。
- A. 今お話頂いたような研究所を私も目指したいと考えています。研究所にも、HEMT (高

電子移動度トランジスタ) や各種技術に長けたフェローは何人もおりますが、一方で彼らは富士通のビジネスに向き過ぎているなど、若干優等生的なところもあると認識しております。難しいところですが、技術ばかりを志向し過ぎるとビジネスに結びつかなくなり、富士通のビジネスを支えることばかり意識すると先進的な技術が生まれにくくなってしまいます。ここをバランス良くやっていきたいと思っています。また、対外的な発信についても社長が先頭になって強化を進めており、国内はもとより海外メディアの取材対応なども積極的に受けるようにしています。それを他の研究員も見習って、お話頂いたような研究所になれるよう、努めてまいります。

#### **質問者 D**

Q. 研究所の人材について、博士課程の人数、外国人の人数について教えてください。

A. 博士課程の人材については、トータルでは 20%位だと思いますが、最近の採用実績では 40%位まで上がっています。外国人については、研究所の人員約 1500 人の内、海外の研究所で働く 200 人はほぼ外国人です。また、国内で働く 1300 人の内 40 人位は外国人となっており、トータルでは 1500 人の内、240 人が外国人となります。国内にある他社の研究所と比べても、比率は少し高いと思います。

以上